©海事プレス社2024 禁無断転載

Daily Cargo

FRA貨物処理能力を拡大へ

■40年に300万トン超え見込む

独フラポートはこのほど、フランクフルト国際空港（FRA）の貨物地区の機能を拡充するマスタープランを発表した。FRAでは2040年に貨物取扱量が年300万トンを超える見通しで、応需体制を整えるねらい。貨物処理能力で欧州首位の貨物ハブ空港であり続けることを目指し、デジタルトランスフォーメーション（DX）・プロセス革新、スペースの最適化、スペースの開発――の、3つを柱とする再開発計画を推進する。

FRAの年間貨物取扱量はおよそ200万トン前後。過去6年の貨物取り扱い実績（郵便、トランジットを含む）を見ると、18年が221万3887トン、19年が212万8476トン、20年が195万2628トン、21年が231万7882トン、22年が200万9433トン、23年が193万1296トン。

40年までに300万トンの需要見通し通りとなれば、ピーク時の物量は過去最高の21年よりもさらに50%増えることになる。

「予想される成長、変化の要件を考えると、今こそ包括的な技術革新と投資パッケージが必要。実需に即した、持続可能な空港開発を推進しており、今回カーゴハブ・マスタープランを発表した理由だ」（フラポートのピエール・ドミニク・プリュム航空・インフラ担当エグゼクティブ・ダイレクター）とする。

物量増に加え、特にモノの流れの変化、デジタル化、持続可能性が課題になると考えている。マスタープランの一つとなるDX・プロセス革新の分野では、包括的なデジタル化プロセスを採用する。具体的には、カーゴ・コミュニティ・システムを介し、参加企業にリアルタイムの分析や洞察、スマートな管理オプションを提供する。このシステムをさらに発展させるため、フラポートと独ソフトウェア開発会社DAKOSYは合弁会社allivateを設立した。FRA空港の貨物コミュニティとはすでに、貨物のDXをさらに加速させるロードマップについて合意済みだという。

FRA南部貨物地区「カーゴシティ・サウス」では、既存スペースの再設計、開発を計画。飛行業務エリアと貨物スペースを入れ替え、エプロンに直結する位置に最大4万3000平方メートルの貨物スペースを追加でねん出する。これにより、グランドハンドリングとスペシャル・サービス向けスペースとして、新たに2万平方メートルが追加される試算だ。

それぞれの貨物特性にあうハンドリング能力も拡大する。空港西側の工場跡地に新たに「ロジスティクスハブ・ウエスト（LogisticsHub West）」を建設する。持続可能でデジタル化された、スマートなインフラを活用した施設とする計画だ。開発工事は2段階に分けて行う。28年には、総面積約25万平方メートルの敷地に建設する、最大15万平方メートルの上屋スペースを含む物流施設が利用可能になる見通し。30年以降は、ロジスティクスハブ・ウエストを、道路、鉄道、空路の輸送モード3種が接続するハブ空港に発展させることも一つの選択肢とし、検討が進められていく。

カーゴハブのマスタープランは、フラポート・グループ全体の戦略「Fraport.2030」の一環として展開するもの。計画の実行には、南部貨物地区の駐機場や滑走路に近接する空港設備を含む、空港全体のゾーニングの調整を前提とする。